

中と、乾いた咳とニツニツしたがる龍鏡

と行く人があつた。くすんじ色のスコップの煙

三ツ物、それを積り積りぐしをぬれど、田中高

の黒い暗さ 此暮の 新調らしく、大角子手榴

のしと黒皮の靴靴の行 と 探訪めしやら、

暮の懐の如く膨れこめと小脇に抱へて、
懐

枯柳と柱並べと片側の人送と、
立と俯視 らあ り

中、徐ろ月、枕より行く、
年の比は **一**

三十五六でかきあらう、
而長の **類**

瘡 ニ のけ眼と凹みと見えは 満柳 の の 月此

実 然 仰 立 づ け 一 解 仰 申 手 取 り 汚 れ 子 所 著 ぐ と	錦 河 と 逢 々 々 高 業 学 程 の 積 年 一 花 魁 花 時	は、 解 可 月 も 之 れ と 知 ら ぬ	又 し け も ツ イ 我 知 ら ぬ 子 思 入 っ て 了 小 の	溜 息 一 吐 く。 何 事 の 心 の 懸 々 事 が 有 っ て、	え の 著 げ 世 に 取 り 付 け て、 時 と 事 を は 木 ツ と	や う に 一 志 き り 氣 定 め ぬ 心 の が、 思 ひ 出 し 又	悠 々 と して ゐ る 心 の 懸 々 思 ひ 出 し こ	れ 巾 衣 が、 這 の 運 び 心 煩 々 子 勢 甚 く、 云 逆	薬 と 現 し み が ち の 身 の 上 と 察 せ ら れ る が、 と
--	--	--	--	---	--	--	--	---	--



其度の廻子の角と

鉛側の時計と出しと増と視て、
小川所へ半葉

指針の曲らうとしと
濁環つとが、千ヨソ

と舌鼓と一ッ折つて終
決知とと執力よ

小石より蹴蹴くより分る
小川所の通り一あて、

ト或る西洋料理が一術と這入つと。

又こと、
○これには月

二階一とらつて
辛

竹園の
空持子と腰と卸

と先づ
は宛ルあれ並循向いてりふと、

お車い
と一ッ向ふうテーブルかき茶と掛

けられぬが
新あ

お車い
お車い
お車い

のやうなのが二海三海生かしてはるが知りであらう。

 し、全五海軍の用子多井、~~海軍~~二色頭も、~~海軍~~

 赤い帯のワンタリおっくりに、~~海軍~~ 服鼻立をわが海軍に

が如く上月と逢つて其戸の立と見やせ、
 紫色の帯を、
 女淋しげに微笑と逢へて、

山田君、
 山田君、
 山田君、

いかと思つて袂のりや、幸ねそッちのテ一

山田君、先刻かう人が如何す

ブルへ行つて知らん款じ。何と其孫の心し

さういふ涙やおいが、
 泣く知らたかついほんどからと申派おと

こゝに苦笑す。
 何とせん廿海軍の女、其決因

まち、此方へ来る、一所をやらう、僕も

十廿松屋製

十廿松屋製

十廿松屋製

今来たばかりだ。

と云われて待たせさうであらうが、それだ。

初階いところから午の如くおれはく明もみ

へ出て来て、先刻よりおれと待たせさうな事

採二拾三種、神理を述べた。

まア、一杯やれ。

とコツプと試これとが、午試出さまいで

僕はおさう。

何故？もしう学政はほんどのうらう？

何故？日守んいけれども
何故？
何故？

し

し

「チャンとス〜」

ど	「	い	ヤ	隠	「	と	け	ぢ
か	「	何	ン	す	「	隆	れ	や
く	「	と	と	ふ	「	味	ど	好
何	「	と	知	く	「	二	る	い
と	「	と	つ	〜	「	三	：	ぢ
さ	「	と	と	。	「	五	少	や
さ	「	と	と	。	「	六	し	な
?	「	と	と	。	「	七	未	い
!	「	と	と	。	「	八	ど	か
	「	と	と	。	「	九	ニ	か
	「	と	と	。	「	十	ソ	!
	「	と	と	。	「	十一	ノ	
	「	と	と	。	「	十二	用	
	「	と	と	。	「	十三	が	
	「	と	と	。	「	十四	有	
	「	と	と	。	「	十五	る	
	「	と	と	。	「	十六	ら	
	「	と	と	。	「	十七	ら	
	「	と	と	。	「	十八	ら	
	「	と	と	。	「	十九	ら	
	「	と	と	。	「	二十	ら	

十ノ廿松屋製

7